

アприオリな真理についての一考察

仲宗根 勝仁

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程

チャーメーズが提唱する認識的二次元意味論(epistemic two-dimensional semantics、以下 E2D)は、アприオリ性を認識的必然性へと接続することを目的の一つとしてきた。その試みが明示的に打ち出されているのが、Chalmers(2006)で掲げられた次の Core Thesis (以下 CT)である。

任意の文 S について、 S がアприオリなのは S が必然的な一次内包を持つとき、かつそのときに限る。

チャーメーズは、認識的可能性から外延への関数としての認識的内包(epistemic intension)を一次内包の解釈として採用し、すべての認識的可能性において真である文はアприオリであると論じた。しかし CT は、入れ子問題(nesting problem)と呼ばれる問題によって脅かされる。入れ子問題とは、アприオリ性を認識的必然性のオペレータと見做した時に、アприオリ性オペレータと他の認識・様相オペレータとが入れ子状になった文が引き起こす問題である。この問題によって、(1)アприオリ性が純粋に認識的(purely epistemic)である(すなわち CT が真である)ことと、(2)アприオリ性が様相的に叙實的(modally factive)である(必然的に、アприオリな文(命題)は真である)ことを同時に満たすことは不可能であることが明らかになった。この問題に対処するために、チャーメーズら(Chalmers and Rabern(2014))は(1)を拒否することで(2)を擁護し、フリッツ(Fritz(2013))は(2)を拒否することで(1)を擁護する道を探っている。前者の場合、CT が提示するアприオリ性と認識的必然性との鮮やかな対称性が失われ、E2D の魅力が大きく減退し、後者の場合、アприオリでありかつ偽であることが可能である、ということを説得力ある仕方で説明しなければならない。

本発表の目的は、入れ子問題に対するチャーメーズらやフリッツによる応答を通して、アприオリな真理の意味論的な説明がどうあるべきかを考察することである。特に、CT を支えている直観、すなわちアприオリな真理が何らかの必然性を伴っているという直観を擁護出来るかどうかを考察する。私見では、(1)を擁護し(2)を拒否することは可能である。また、(2)を拒否したとしても、「現実世界で、

ある文がアプリアリでありかつ偽である」ということは帰結しないことを示し、(2)の拒否が私たちの直観に反しないことを明らかにする。

参考文献

Chalmers, David J. 2006. “The Foundations of Two-Dimensional Semantics”, in *Two-Dimensional Semantics* (edited by Manuel Garcia-Carpintero and Josep Marcia), Oxford University Press, pp. 55-140.

Chalmers, David J. and Rabern, Brian. 2014. “Two-dimensional semantics and the nesting problem”, in *Analysis*, Vol. 74, No. 2, pp. 210-224.

Fritz, Peter. 2013. “A logic for epistemic two-dimensional semantics”, in *Synthese*, Vol. 190, issue 10, pp. 1753-1770.